

# 昭和初期の公共視覚メディア

——渋沢民具学における映画と博物館——

Public Visual Media in the Early Showa Period

Museums and Films in Keizo Shibusawa's Academic Activities

飯田 卓

IIDA Taku

## 要 旨

神奈川県立日本常民文化研究所には、渋沢敬三とアチックミュージアム同人が昭和初期に撮影した映画（動画）資料が継承されている。当時、興行以外の目的をもつ映画撮影は始まったばかりで、多くはアマチュア映画として撮影された。渋沢らによる映画は、どのように位置づけられるのだろうか。本稿では、この問いを明らかにするため、博覧会や博物館、映画など、公共の場で観覧された視覚メディアの状況を時代背景に照らしつつ整理する。そのうえで、渋沢がめざした民具学と公共視覚メディアとの関わりを整理し、その性格を従来とは異なった切り口で明らかにする。

渋沢たちが残した映画は、民具学を補助する手段として位置づけられていた。これは、もうひとつの公共視覚メディアである博物館の建設が民具学発展の不可欠なプロセスと位置づけられていたのと対照的である。こうした違いが生じた理由のひとつは、博物館が長期間存続して学術的な参照が可能になりつつあったのに対し、映画の上映はそのようなかたちで発展していなかったことにある。

渋沢がめざした民具学は、多数の研究者による共同研究であり、また地域の民俗事象全体との関わりで進められるべき総合研究であり、さらには博物館建設とも連動する啓発的研究だった。こうした「渋沢学」の文脈において、誕生後まもない映画は、学術資料としてというよりは、現地のようにすなわち簡潔に伝えるコミュニケーション手段としての役割をはたすことが多かった。この事実は、渋沢らが撮影した映画の価値を下げるものではない。むしろ、当時の学術において視覚メディアが果たした役割を再評価することにつながる。

【キーワード】 博物館、映画、共同調査、アチックミュージアム、民族学

## 1. 課題の所在

柳田國男とその周辺を日本民俗学の主流とする見かたは、いまだに衰えをみせていない。しかし近年は、「傍流」の動きを積極的にとりあげ、「主流」が看過してきた問題群をあらためて見なおす動きが盛んになりつつある（菊地 2004；礫川 2006；小池 2009；重信 2009；丸山 2012）。渋沢敬三と

その周辺も、そうした流れのなかで、盛んに論じられてきた（横浜市歴史博物館 2002；鈴木 2010；国立民族学博物館 2013）。渋沢が日本民俗学に与えた影響は、文化財保護制度の分野などでは小さくないので（菊地 2001）、彼を「傍流」に位置づけるのには、やや無理があるかもしれない。しかし、彼の人生の大半は実業界との交流に費やされていたため、彼自身は民俗学についてわずかしか書き残しておらず、傍流の研究が多くを明らかにしてきた（櫻井 2013）。また、彼の学界ネットワークのひとつである日本民族学会（日本民族学協会）との関係も、なお明らかになっていない部分が多く、今後に残された研究課題は多い。

本論文は、日本民俗学の傍流というよりも、その外側から、あるいは内と外との境界というべき限界アカデミズム（飯田 2011）の立場から、渋沢流の民俗学を捉えなおす試みである。その作業にあたっては、渋沢と日本民族学会との関係にも目を配りたい。

渋沢は、当時の歴史学が着目しなかった庶民（common people、とりわけ漁民）に、当初から着目していた。そして、その問題意識を深めるために、民族学や日本民俗学を活躍の場として選んだ。渋沢民俗学の特徴としては、①民具や絵図などの視覚的な資料を重視したこと（渋沢 1992c；丸山 2013）、②資料の収集と共有を重視したこと（渋沢 1992d, e；宮本 2008）、③地域内における民俗諸事象の結びつきとその記述（モノグラフ）を重視したこと（渋沢 1992a；有賀 1972）、などが指摘されている。これらの特徴はいずれも、渋沢が若い頃に生物学を志し、その方法論を意識しながら民族学や日本民俗学を構想したことに関わってよう。生物学の下位分野でいうと、①は形態学や分類学の特色であり、②は標本資料論に、③は生態学に対応する。渋沢はさらに、これらの研究を深化させることで、一般理論たる「民具の遺伝学」ないし「民具の進化論」に到達しようとした可能性もある（宮本 1979：13-19）。

渋沢は、柳田とは異なるやりかたで、しかし柳田と同じく最先端の学問分野を広く見わたしながら、「庶民の学」を構想しようとしたといえる。こうした「渋沢学」の全貌を描き出すには、その形成期のさまざまな時代状況をふまえる必要がある。

本論文ではとくに、渋沢の生涯が 19 世紀後半から 20 世紀後半にわたったことをふまえ、この時期のニュー・メディアが渋沢学に与えた影響を分析する。ここでいうニュー・メディアは、具体的には博覧会と博物館、映画であり、本稿で「公共視覚メディア」と呼ぶものである。これらのメディアは、視覚的である点のみならず、公共の場で観覧されるという点でも共通していた。さらに 3 つのメディアは、発明されてから転機を迎えるまでの時期が、いずれも 19 世紀後半から 20 世紀後半までに重なっている。3 つのメディアは、この時期、科学と深く結びつき、その成果を社会に普及させるうえで重要な役割をはたした。これらのメディアに対する期待は、主流派民俗学と較べたとき、渋沢学のきわだった特徴となっている。

上記からわかるように、同じ視覚メディアであり、渋沢学に大きく影響したであろうグラビア雑誌や写真、絵図などのメディアは本稿では扱わない。また、同時代に栄えた新聞などのマスメディアや、レコードやラジオなどの音声メディアも、本稿の対象にはしていない。

本論文ではとくに 1930 年代に焦点をあて、公共視覚メディアに対する期待感が、渋沢とアチックミュージアム同人を研究に駆りたてたことを示す。また、この 1930 年代の終わりに彼らの活動が滞る要因についても、この観点から考察したい。

## 2. 視覚メディア論からみた渋沢学

上述の課題にとり組むにあたって、丸山泰明の近著（丸山 2013）とその関連論文（丸山 2006）は示唆に富む。彼は、日本における博物館の発展を整理するという関心から出発して、結果的には渋沢学の考察にかなりのエネルギーを傾注した。その過程で得られた洞察は、本論文の基礎となるべき重要なものばかりだ。また、渋沢と映画との関わりに関しては、木村裕樹が興味深い論考を発表している（木村 2014）。

とはいえ、観察に理論の負荷がかかるのと同じように、出発点が異なれば依拠する資料も異なってくる。筆者の問題意識からみれば、緻密かつ周到な2人の論者の議論にも、否応なくもの足りなさが残る。そこでまず、丸山や木村の議論の到達点を筆者の観点から整理するとともに、残された課題をまとめておこう。

日本における民俗博物館の建設運動は、工業化や都市化のプロセスときり離せない。工業化や都市化が進む動的な時代に、伝統的なものを拠りどころとするため、保存し観覧できる施設を作る動きが高まった。こうした動きをふまえて、民具に関心をもつ渋沢敬三と、民家に関心をもつ今和次郎は、2つの博物館を実現する。ひとつは、大日本聯合青年団郷土資料陳列所であり、もうひとつは、日本民族学会附属民族学博物館だった。そして、それらのモデルとなったのは、当時日本と同じように国民意識が高まっていた北欧の博物館、とりわけスウェーデンのスカンセン野外博物館だった（丸山 2013）。

丸山は、日本民族学会（現在の日本文化人類学会）に附属する博物館を「日本民族博物館」と記しているが、本稿では、国立民族学博物館（2013）が採用した呼称に従い、「日本民族学会附属民族学博物館」とする。ただし、日本民族学会は1942年から1964年まで、「日本民族学協会」という組織名だったことがある。このため、この時代の正式名称は「日本民族学協会附属博物館」である。以下では、1974年に発足した国立民族学博物館と混同するおそれがないかぎり、学会ないし協会に附属する博物館をたんに「民族学博物館」と略記する。

丸山は、博物館における視覚体験を「各地の生活を見比べる」ものだと要約する。そして、博物館とは、鉄道からの車窓の眺めを居ながらに体験できるようにしたものだという（丸山 2013：51-64）。この指摘は重要で、視覚メディアが置かれていた当時の状況を簡潔に表すと同時に、渋沢が受けた影響の本質も突いているように思える。

たしかに、車窓から投げかけるまなごしは、他者との直接交渉をとまなわなない純粋な視覚体験であり、博物館来館者が展示に向けるまなごしと酷似する。また、丸山は、渋沢敬三と今和次郎がともに旅行好きであることを指摘し、車窓からの観察が学問的な洞察の源泉にもなっていた可能性を示唆している（宮本 2008：119-133も参照）。

こうした重要な指摘をおこなっているにも関わらず、丸山は、議論を民俗博物館にかぎっている。渋沢は旅行だけが趣味だったわけではなく、生物学にも関心を示していたのであれば、各国の自然史博物館も考察に入れて然るべきだろう。アメリカ自然史博物館や初期の大英博物館をはじめ、民族誌資料と自然史資料がわがちがたく結びついた博物館は、現在でも少なくない。また、渋沢が理事長を務めていた日本民族学協会は、形質人類学者を中心とする日本人類学会とも関係が深く、文系の人類学と理系の人類学は現在よりも密接な関係にあった。このことをふまえて以下では、日本民俗学というよりは、総合人類学をめざした民族学の立場から、さまざまな視覚メディアと学会との関係を整理していきたい。

いっぽう木村の論考は、ある意味で丸山と対照的である。丸山の記述を読むかぎり、博物館事業に対して渋沢は、かぎりなく情熱を傾けた。それに較べると、映画（フィルム）に対する渋沢の情熱は、むしろ控えめだ。上流階級の趣味として流行しはじめたアマチュア映画の製作を、渋沢敬三の父 渋沢篤二がまず始めた。敬三は、それをひき継ぐかたちで家族の行事を撮るかたわら、調査旅行や民具製作、芸能など、研究に関する映画も撮りはじめた。しかし木村によれば、調査旅行の参加者が残した文章から受ける雰囲気と、映画のそれとはかならずしも一致しない。とくに、旅行先の人たちが感じている生活苦に関して、文章が積極的にとり上げているにもかかわらず、映画はそれをおぼろげにしか映しだしていない。

このことについて木村は、文章が描ききれない生活の総体を映画が捉えたためだと解釈した。文章と映画とでは、得意とする領分が異なるというわけだ。もしそうなら、すぐれたメディアである映画作品の製作に対してなぜ渋沢が積極的に支援しなかったのか、説明がほしいところだ。この点に関して木村は言及を控えているが、ただひとついえるのは、旅行団の印象とは異なる現地の一面をカメラが拾いあげたという事実だ。このことの意味を渋沢たちがどう考え、映画をいかに活用しようとしたか（あるいはしなかったか）は、今後の研究の課題となろう。本稿では、この点を論じきることはできないが、他の視覚メディアとの関わりの中からは、渋沢が映画といかにつき合ったかをみていきたい。

### 3. 公共視覚メディアの一世紀

本章では、渋沢敬三の事績や活動からいったん視線を離し、博覧会と博物館、映画という3つのメディアについて、19世紀後半から20世紀初頭までの状況を見ておきたい。いずれのメディアも、この時期、あらたなメディアとして注目を集めるだけでなく、人びとの社会生活を大きく変えるだけのインパクトをもっていた。また本章では、渋沢学との関わりをたどる準備作業として、渋沢が志した生物学や民族学（社会人類学、文化人類学）とそれぞれのメディアとの関わりもまとめておく。

#### 1) 欧米の博覧会

まずは、博覧会に目を向けよう。渋沢敬三は、博物館や映画ほどの関心を博覧会に対して向けず、みずから手で博覧会を組織することもなかった。渡欧していた1922年から1925年にかけても、ヨーロッパで国際博覧会が開かれていたわけではない。しかし、彼の祖父である渋沢栄一が1867年のパリ万博に参加し、資本主義や民主主義に開眼した事実を考えあわせれば、敬三もまた博覧会に無関心だったとは思えない。

博覧会の歴史は一般に、1851年のロンドン万国博覧会（万博）から語られはじめることが多い。しかしこれ以前にも、海外からの出品をともしなわなない大規模の展示会は開かれていた。たとえばフランスでは、市民革命からまもない1798年、王立工場を再建するための在庫処分が国家事業としておこなわれたのをきっかけに、1849年までに11回の国内博覧会が開催された。

国際博覧会の名にふさわしい規模の博覧会は、1851年のロンドン万博が嚆矢だろう。しかし国際博覧会の定義が明確になるのは、1928年に国際博覧会条約が締結され、博覧会国際事務局（BIE）が公認業務をおこなうようになってからで、ロンドン万博の開催はそこから70年以上もさかのぼる。その間には、観客動員が少ない国際博覧会や、記録を入手しにくい国際博覧会も開かれた。その意味で、条約から70年以上も前に開催されたロンドン万博は、国際博覧会の前史にも位置づけられよう。

しかし、博覧会というメディアがめずらしく、時代を画するほどの強い輝きを放っていたのは、なんとといっても19世紀後半だった。日本のおもだった博覧会研究も、BIE設立以前の万博について、多くの紙面を費やしている（吉見1992；伊藤2008）。ロンドン万博の観客数は、141日間で約600万人と控えめなようにみえるが、この数字は当時のロンドン人口の3倍、イギリス人口の3分の1に相当するという（吉田1985, 1986；吉見1992：47）。またロンドン万博は、ヴィクトリア女王の夫であるアルバート公がみずから陣頭指揮をとり、国威発揚の場ともなった。

欧米の各国政府は、これ以降、国威発揚の手段として博覧会を盛んに利用した。ヴィクトリア朝イギリスのほかは、第二帝政フランス、プロシア、第三共和政フランスなどがそうである。アメリカ合衆国も、アメリカ独立100周年（1876年フィラデルフィア万博）、コロンブス新大陸「発見」400周年（1893年シカゴ万博）、ルイジアナ購入100周年（1904年セントルイス万博）、太平洋「発見」400周年（1915年サンフランシスコ万博）など、さまざまな機会に万博の開催を企てた。

各国のなかでももっとも開催回数が多いフランス（パリ）の万博をみると、観客数の増加とともに内容が広がるようすがよくわかる（吉見1992；Ageorges 2006）。1855年（約520万人）には、1851年のロンドン万博（約600万人）を踏襲して、シャン・ゼリゼの主会場に産業機械など農工業分野の商品が多数展示された。ただし、その正式名称「産業・農業・美術の製品の国際博覧会」が示すように、美術作品も大きくとりあげられた。

それに続く1867年（680万人）からは、主会場がシャン・ド・マルスの産業宮に移された。ここをとり囲むように各国のパビリオンが建ちならび、その外側をさらに各種の見世物小屋がとり囲んだ。1878年（約1,600万人）には、会場がセーヌ川対岸にまで拡大し、トロカデロ宮が建設された。万博閉幕後、この建物の一部は、同じ年に設立されたトロカデロ民族誌博物館が用いた。その後は、エッフェル塔が建設される1889年（約3,240万人）、20世紀最後となる1900年（4,810万人）と、観客数が大きく伸びていく。

観客数がこの水準に戻ってふたたび成長をみせるのは、1964年のニューヨーク万博（5,160万人）以降である。シャン・ド・マルスではこの間、1937年にも、規模の大きい一般博が開かれた。観客数は3,400万人だった。このとき、トロカデロ宮は建てかえられてシャイヨ宮となり、内部のトロカデロ民族誌博物館は、翌年に自然史博物館のコレクションを加えて、人類博物館（ミュゼ・ド・ロム）に改組された。この博物館では、パリ大学民族学研究所の教育もおこなわれ、日本から来た岡本太郎や山田吉彦（きだみのる）がマルセル・モースらの講義を聴講したことはよく知られている（竹沢2001；モース研究会2011）。

一般博より規模の小さい特別博としては、1925年の装飾工芸博覧会や、1947年の都市生活博覧会などがある。しかし、さしあたって重要なのは、植民地省が主催した植民地博覧会だろう。1894年のリヨン植民地博、1898年のロシュフォール植民地博、1906年のマルセイユ植民地博などがそれで、出展は原則として、フランスの植民地や海外領土からにかざられている。1907年には、パリでも植民地博が開催された。会場はパリ東部郊外のヴァンセンヌの森の熱帯農業園で、従来の万博とは系譜を異にしていることがわかる。万博都市パリで開かれたものだけに、このときの観客数（1,800万人）は、マルセイユのとき（200万人）とは桁が違う。

植民地博は、1922年にはふたたびマルセイユで、さらに1931年にはふたたびパリのヴァンセンヌの森で開催された。この頃になると、フランスの植民地統治は洗練の度あいを高めており、植民地の文物を紹介するだけで3,350万人もの観客を動員できた。この数は、6年後に開かれる一般博の観客数とほぼ同じである。20世紀前半には、植民地のエキゾチックな建造物や文物が、博覧会の大きな呼びものになったことがうかがえる（竹沢2001；Ageorges 2006）。

## 2) 日本の博覧会

ロンドン万博が開かれたとき、日本ではオランダを除く欧米各国とは外交関係がなく、万博への参加も考えられなかった。しかしその直後、1853年にペリー率いるアメリカ軍艦隊（黒船）が浦賀沖に来航し、徳川幕府は次々に欧米各国と通商条約を締結した。そして早くも、1862年の第2回ロンドン万博において、駐日イギリス公使オールコックが日本の文物を出品し、開会式には江戸幕府公式の文久遣欧使節団が参加している。このことは、外交において万博がきわめて重要な役割をはたしていたことを示している。これに続く1867年の第2回パリ万博では、徳川幕府と薩摩島津藩、佐賀鍋島藩がそれぞれに参加し、出品をおこなった。

そのいっぽうで日本人は、自国で博覧会を開催することにも熱心だった（伊藤 2008）。その背景として重要なのは、すでに享保時代、和漢洋の本草学が互いに影響しながら一般化していたことだ。たとえば1757年には、本草家の田村藍水が、薬品会（やくひんえ）と呼ばれる展示会を湯島で催した。これはのちに、門人の平賀源内や松田長元に引き継がれ、1862年の「東都薬品会」までに合計5回の薬品会が催された。ただしこのときは、一般市民が参加できたわけではないので、明治以降の博覧会とは区別したほうがよいといわれる（木下 1997）。

官製の博覧会は、1871年に東京九段の招魂社（現在の靖国神社）で開かれた大学南校物産局の物産会（ぶっさんえ）をもって嚆矢とする。この年は、廃藩置県や戸籍制度の施行、新貨条例の制定など、大きな制度改革がたて続けにおこなわれた年である。物産会の閉幕後には、主催した大学南校自体が文部省へと改組された。物産会に集まった多数の者は、展示された品々から、あたらしい時代のエートスを感じとろうとしたと推測される。このときには、大学南校の田中芳男と、その師匠筋にあたる本草家 伊藤圭介が多数の出品をおこない、本草知識を新時代に活かすことの意義をアピールした（大場 1997；木下 1997）。

翌1872年には、文部省博物館（大学南校物産局の後身）の町田久成が中心となって、湯島聖堂博覧会を催した。これは、翌年に開かれるウィーン万博への出品を日本で先がけて公開するよう企画されたもので、名古屋城天守閣の金の鯨（しゃちほこ）に代表される古美術が主として陳列された。観覧者数は20万人近くにのぼったといわれる（椎名 2005）。町田は、1867年の第2回パリ万博に薩摩藩士として参加した人物だ。1871年には、廃仏毀釈がふき荒れるなか、集古館（古美術館）の建設を献言して、今でいう文化財保護を唱えた。その結果、同年に太政官布告「古器旧物保存方」が發布され、1897年に古社寺保存法が公布されるまでのあいだ、文化財保護の指針となった（関 2005）。この一連の動きにおいて、町田のもとで古美術に関する専門的な知識を発揮したのは、蜷川式胤（のりたね）である。彼が好古家として築いていた同好会的なネットワークは、町田の目標によく合致し、旧製の遺物とされていた品々を新時代の文化財として位置づけるのに役立ったといえる（鈴木 2003）。

1873年のウィーン万博では、大隈重信が事務局の総裁を務め、明治政府が統一日本を代表するかたちではじめての出品をおこなった。このときには、上記の町田久成と田中芳男のほか、渋沢敬三の祖父にあたる渋沢栄一が事務局の御用掛に任命されている（椎名 2005：140）。

1876年のフィラデルフィア万博では、町田久成が事務局長を務めた。この時点で彼は、田中芳男とともに、内務省博物館に所属している。展示場をもたない博物館組織は、のちに東京帝室博物館となり、現在は東京国立博物館となっている。1878年の第3回パリ万博では、殖産興業に努め貴族院議員となる前田正名が事務官長を務めた。

博覧会外交を軌道に乗せた明治政府は、5回の内国勸業博覧会を開催する。このうち、東京でおこなわれた最初の3回（1877年、1881年、1890年）は、文部省から内務省、さらに農商務省、宮

内省へと移管されていく博物館の開館に、大きな役割をはたした（次節参照）。博覧会開催のために建てた建物が、博物館の建物として使われることになるからだ。

これに較べると、1895年に京都で開かれた第4回内国勸業博覧会や、1903年に大阪で開かれた第5回内国勸業博覧会は、行政的な布石という性格が薄い。これは、内外の博覧会が回数を重ねるなかで、事務局だけが企画を統括するのではなく、民間がそれぞれの思惑から博覧会を利用しようとしたためらしい。

たとえば第4回内国勸業博覧会は、平安遷都千百年記念祭の一環として開催されたもので、以前の3回に較べるとイベント性を強く感じる。興行的にも113万人の観覧者を集め、東京以外の都市でも博覧会の経済効果が増してきたことをうかがわせる（國 2005）。第5回内国勸業博覧会になると、第1～4回が見世物とはっきり距離を置こうとしたのと対照的に、娯楽性を積極的にとり入れた。夜間の電照をおこなったことも、その一例である。また、内国勸業博覧会としては初めて海外から出展を受け、台湾総督府の主導で台湾館を設置するなど、帝国として成長を遂げつつある日本の外交力（支配力）が誇示された（吉見 1992；松田 2003；國 2005）。

このように行政主導から民間参入へ、先進技術の紹介から植民地の紹介へと博覧会の内容が変容すると、よきにつけ悪しきにつけ、人類学や民族学の専門知識が注目を浴びようになる。じっさい、第5回内国勸業博覧会の台湾館における原住民の展示は、伊能嘉矩（かのり）の台湾調査の成果を色濃く反映していた。伊能は、台湾総督府に所属する行政官だが、当時日本人に知られていなかった台湾各地の「旧慣」を実地に調査しており、在野の研究者とみなすこともできる（松田 2003）。

東京帝国大学理科大学（現在の東京大学理学部）人類学教室の坪井正五郎の協力によって、生きた人間を展示する「学術人類館」が設置されたのも、そうした背景のもとでだった（松田 2003；山路 2008；川村 2013）。外交的な配慮により、支那人（中国人）の「展示」は、未然にとり止められた。しかしいっぽうで、開館後に抗議の対象となった朝鮮人や琉球人をはじめ、アイヌ人や台湾人、マレー人、ジャワ人、インド人、トルコ人、ザンジバル島人などが、会場に再現された現地の家屋に「住まわせ」られ、「展示」された。

坪井は、東大在学中の1884年に「じんるいがくのとも」の名で現在の日本人類学会を発足させ、東大を卒業後、東大に存在していなかった人類学科の設置を願いでて大学院に入学したという経歴をもつ。遊学中の1889年には第4回パリ万博を観覧し、1892年に帰国して、人類学教室の初代教授に就任した。日本における人類学の創始者とでもいべき大家が、20世紀に入ってまもなく開かれた博覧会で、忌まわしい人間展示に協力したのは、どういうわけだろうか。

この点について山路勝彦（2008：53）が指摘するのは、交通が不便だった当時に異文化を調査するのがむずかしかったことだ。異文化の専門家たる人類学者とて例外ではなく、坪井自身の業績も、国内の風俗や遺跡・遺物に関わるものがほとんどだった。こうしたなか、たとえ博覧会という特殊な状況であろうとも、異文化の習俗を目の当たりにできる機会は貴重だった。金田一京助のアイヌ語研究のように、博覧会が研究の深化をもたらした例もある。研究者としての坪井の素朴な好奇心は、対等であるべき人間関係に優劣をつける植民地的状況のなかで裏目に出てしまい、のちに忌まわしいと評価されるような愚挙に到ったのだろう（川村 2013：209-211も参照）。

筆者の見解も上記とほぼ同じだが、なおつけ加えるとすれば、異なる地域から得られたサンプルを一堂に会して比較するやりかたが、動物学の常套手法に酷似することだ。自然史博物館の昆虫標本や恐竜骨格標本を思いうかべてみればよい。本来ならばおこなえない観察や比較が、動物学者の標本収集活動と博覧会関係者の企画によって、専門的知識をもたない市民にもおこなえるようになったのだ。理学部で動物学を修めた坪井は、まさにその点にこそ博覧会の意義を認めたのではな

いか。ただ不幸なことに、人類学が根づいて十年余りしか経たない日本では、生身の人間以外の適当な展示標本が見当たらなかった。

ヨーロッパなどでは、こうした人間展示を「植民地村」と表現し、よりセンセーショナルな響きをもつ「人間動物園」とは区別している。人間動物園とは、異文化に属する人びとを舞台上にあげ、より強烈なかたちで公衆の視線にさらすような展示である (Arnaut 2011)。しかし理念のうえでは、植民地村もまた、人間動物園と呼ばれておかしくない点があった。自然史博物館の動物園では、死んだ標本ではなく生きながらの動物をまさしく比較するために、飼育して展示していたからだ。現在の動物園は、希少な動植物種を繁殖させるなど、異なった役割が期待されるようになっている。しかし当時の動物園において、動物たちは生きた標本なのであり、人類館に連れてこられた人たちも、同じまなざしを向けられることが想定されていた。

人類学者としてたいへん残念なことではあるが、こうした文化をめぐる不平等性について、当時の人類学や「土俗学」はあまりに鈍感だった。坪井は、第5回国勸業博覧会に続いて、1912年に東京で開かれた拓殖博覧会でも、「帝国版図内の諸人種」を会場に招聘するのに協力した。さらに、坪井の死後に人類学教室をひき継いだ松村瞭もまた、1914年に東京で開かれた大正博覧会において、人間展示を含む南洋館の開設に協力したことが明らかになっている (山路 2008)。

### 3) 博覧会から博物館へ

博覧会で展示された文物の一部は、その後に常設の施設に収められ、博物館展示として生まれかわる。1851年の第1回ロンドン万博から生まれた産業博物館 (現在のヴィクトリア・アンド・アルバート博物館) をはじめ、1873年ウィーン万博から生まれたウィーン民族学博物館、1878年の第3回パリ万博から生まれたトロカデロ民族誌博物館、1893年のシカゴ万博から生まれたフィールド自然史博物館、1897年ブリュッセル万博から生まれた王立中央アフリカ博物館、1931年パリ植民地博覧会から生まれた植民地博物館 (現在はケ・ブランリー美術館に統合)、1937年の第6回パリ万博から生まれた人類博物館 (同左) など、枚挙にいとまがない。このリストを見ると、民族誌博物館がとりわけ多数であることに気がつく (吉田 1999; 竹沢 2003)。

初期の博物館としては、1753年に設立された大英博物館や、1793年に展示を始めたルーヴル美術館をはじめ、博覧会と無関係に設立された例も多い。しかし19世紀後半になると、博覧会跡地に多くの博物館が設立されており、日本の明治政府も両者を連関したものとみなし、さまざまな政策を打っていた。

たとえば、1871年の物産会で大学南校が展示した品々は、同年の改組によって文部省博物局へ、そして翌1872年の改組によって文部省博物館へ、さらに翌1873年の改組によって太政官正院博覧会事務局へと引き継がれた。この組織は、ウィーン万博の実質的な事務局組織だが、その前身の文部省博物局は、上述したように、ウィーン万博への出品を日本で先がけて公開した。職員たちは、博覧会と博物館を行き来しながら働いていたことがわかる (吉田 1999; 関 2005)。

この組織が1873年に文部省から太政官へ移管されたのは、博覧会実務を重点的にこなすことを期待されたからだろう。しかし、大学南校の時代からこの組織を掌握していた文部省にしてみれば、博覧展示企画の部局をとり上げられたことになる。このことについての申したてが認められて、ウィーン万博が閉幕してしばらくした1875年、博覧会事務局は内務省博物館と文部省東京博物館とに分かれた。前者は現在の東京国立博物館、後者は国立科学博物館の前身である。ウィーン万博の閉幕後、事務局の副総裁を務めた佐野常民らの事業報告を受けて、近代博物館の建設がいよいよ検討されはじめたのだ。ただしこの時期には、いずれの博物館もまだ、常設展示やそのための施設



をもたない（東京国立博物館 1973；椎名 2005）。

内務省博物館は、春と秋に山下門内の敷地で小規模の博覧会を開催したほか、上野でも内国勸業博覧会を開催した。1877年の第1回内国勸業博覧会、1881年の第2回内国勸業博覧会、1890年の第3回内国勸業博覧会である。そのときに建てられた建物の一部（第1回＝美術館、第2回＝博覧会本館、第3回＝参考館）は、のちに博物館展示に流用された。これと前後して1882年、前年に内務省から農商務省へ移管されていた博物館が開館した。現在の恩賜上野動物園も、博物館附属動物園としてこの年に開園した（佐々木 1975）。このときの館長は町田久成だったが、同年に彼は辞職し、田中芳男が館長となった（東京国立博物館 1973；椎名 2005）。この博物館は1886年に宮内省へ移管され、いくつかの名称変遷を経て、1900年には東京帝室博物館となった。第二次世界大戦後の1947年、ふたたび文部省が管轄するようになり、1952年に東京国立博物館と呼ばれるようになった。

東京博物館（現在の国立科学博物館）の整備には、1876年フィラデルフィア万博で実務を担った田中不二磨が関わった。彼は渡米時にトロント教育博物館を訪れ、それを博物館構想のモデルにしたといわれる。1877年には、内務省（農商務省）博物館に先んじて建物が完成し、開館と同時に名称を教育博物館と改称した。初代館長の矢田部良吉は、同じ年にできた東京大学で植物学教室の担当教授を兼任しており、お雇い教師のエドワード・モースに博物館嘱託をひき受けさせている（椎名 1988）。モースは、動物学者として来日したアメリカ人で、大森貝塚を発見して日本考古学の礎を築いたことはよく知られている。

教育博物館の特徴として、所蔵する標本資料を学校教師らの利用に供する任務を重視したことがあげられる。実験器具のほか、標本そのものも貸しだしたり払いさげたりして、学校教師の便宜を図った（椎名 1988）。こうした事業は、内務省・農商務省の博物館にはみられなかったもので、現在の博物館運営においてもおおいに参考になる。

初期の博物館としてはもうひとつ、1882年に開館した靖国神社境内の遊就館がある。この場所は、1871年の大学南校物産会の会場に近く、当時の人びとにとって、博物館を置く場所として自然に受け入れられたと考えられる。ただし、内外の博覧会や博物館に関する文化行政との関わりはまったくなく、陸軍省が管轄した。戊辰戦争で戦没した兵士たちの品々を展示することから始まり、西南戦争や日清戦争など大きな戦役を経るにつれて、各種兵器や外交文書などの資料も展示するようになっていった。

私立の博物館としては、1891年の伊勢神宮農業館が早期に属する。この博物館の展示監修には、博覧会実務の第一人者である田中芳男が関わった（神宮徴古館農業館 2001）。だが日本の博物館としては、19世紀に開館したのは例外に属する。19世紀末に開館した博物館はいずれも、アカデミズムとの関わりが薄く、アカデミズムと市民との接点としての位置づけもほとんどなされていなかった。

こうした日本の状況と較べると、欧米の博物館は早くからアカデミズムと密接に関わり、さまざまな事業をおこなっていた。人類学者が関わった事業としては、エクスペディション事業があげられる。人類学者をまじえたエクスペディションとして有名な、1897年から1902年にかけてのジェサップ北太平洋探検隊は、アメリカ自然史博物館から派遣されたものだった。このエクスペディションを率いた文化人類学者フランツ・ボアズがアメリカ自然史博物館の民族誌展示を充実させたことも、よく知られている（吉田 1999）。対照的に日本では、20世紀後半になっても博物館がじゅうぶん社会的に認知されておらず、海外エクスペディションの事業母体としては大学や学会組織が前面に出ていた（飯田 2007）。

また、1866年にハーヴァード大学が付設したピーボディー博物館や、1884年にオックスフォード大学が付設したピットリヴァーズ博物館など、人類学が発展するなかで設立された博物館も少なくない。

ただし、人類学的な営みにもっとも深く関わったアメリカ自然史博物館ですら、ボアズがコロンビア大学に移籍してしまっただけからは、展示と研究を分離するようになってしまう。吉田(1999)によれば、両者がふたたび接近するようになるのは20世紀後半、すでに渋沢の生涯が幕を閉じてからである。

#### 4) 映画

1895年にフランスのリュミエール兄弟が映画を発明した当時から、映画は異文化を垣間見るための窓であり、民族学や人類学もさまざまなかたちで関わった。前節の末尾で述べたジェサップ北太平洋探検隊と同じ時期、イギリスのケンブリッジ大学から派遣されたトレス海峡探検隊(1898～1899年)は、発明されてまもない撮影機材を携え、儀礼的な舞踊などを撮影した(吉岡・村尾1999; 箭内2014)。

また、これとほぼ前後して、リュミエール社が日本に派遣したコンスタン・ジレルやガブリエル・ヴェール、日本での代理人を務めた柴田常吉らは、19世紀末の日本のようすを撮影した。田に水を送る水車や稲刈りといった農村風俗から、日本舞踊や芝居といった芸能、あるいは鉄道駅など都市のにぎわいに到るまで、さまざまなモチーフが記録されている(東京国立近代美術館フィルムセンター2004)。これらの短い映画(フーテージ)は、1900年の第5回パリ万博でも上映され、好評を博した。

逆に、博覧会のようすを映画化した例もある。リュミエール社が19世紀末に撮影したアフリカ地域関連の映画は、いずれも現地で撮影したものではなく、パリやリヨンにアフリカ人を招いて現地のごようすを再現したときのものだった(Morena 2011)。また、1901年に合衆国ニューヨーク州バッファローで開かれたパンアメリカ博覧会では、映画記録がなされただけでなく、当時大統領だったマッキンリーが会場で狙撃され、数日後に死亡するというハプニングもあった。こうしたニュース性のため、アメリカ議会図書館のウェブサイトでは、関連するフーテージについての情報を詳しく紹介している<sup>(1)</sup>。

日本では、1903年の第5回内国勸業博覧会の不思議館において、活動大写真が上映されたと記録に残っている(國2005)。産業技術の進展を象徴する映画の上映は、それ自体、博覧会の展示物としてふさわしかったようだ。1912年に東京で開かれた拓殖博覧会でも、余興館で活動大写真が上映された。北方のギリヤーク、オロッコ、アイヌなどの風俗をまのあたりにした台湾タイヤル族が、興奮して総立ちになったという(山路2008)。

拓殖博覧会では、会場に再現された家屋などで生活を演じた「諸人種」が一堂に会し、親睦を深めるという催しがあった。これには、内務大臣の原敬や外務大臣の内田康哉をはじめ多くの著名人も出席した。この会では、まず樺太や朝鮮についての映画が上映され、坪井正五郎が式辞を述べた後、樺太の有力者ロコが日本語で答辞を述べたという(山路2008: 57-58)。

製作に費用がかかる現代の映画作品などは、このように、大小の集まりの前座として上映されることは少ないにちがいない。上映料が高くつくし、上映時間も長くなりがちだからだ。20世紀初頭の集まりで前座として上映された作品は、おそらく手のこんだ編集をほどこさない、フーテージに近いものだったと思われる。無声映画の時代なので、吹きこみや音声編集もおこなわれなかったと考えてよい。このことは、当時であってはあたり前のことだっただろう。上田学(2012)によれば、

劇場（映画館）での映画興行は、日本では日露戦争（1904～1905年）の頃によく定着したという。それまでは、寄席で上映されたり、軍艦の模型を動かして海戦を再現する「シネマテック」や影絵芝居の合間に上映されたりした。90分ものあいだ、椅子に座った観客が身動きせずに映画を見るという鑑賞形態は、けっして普通ではなかったのだ。

したがって、当時の映画は、博覧会展示や講演などの補助手段としてこそ、力を発揮しただろう。渋沢がめざした映画作りを考えるうえでも、このことを念頭に置いておかななくてはならない。

これとは異なるタイプの映画として、1922年には、ロバート・フラハティ監督の『極北のナヌーク』がイギリスなどで公開された。この映画は、カナダ極北の先住民（イヌイット）の生活や風俗をとらえたもので、ナヌークというのは主人公の名である。題材自体がエキゾチックであるため、人類学や民族学の関心にも重なる。日本公開時には、この点が過度に誇張され、邦題は『極北の怪異』とつけられた。しかし、この映画が民族誌映画の原点と考えられている理由は、エキゾチシズムだけではない。

1920年代には映画の製作技法が洗練されてきており、さまざまな劇映画が作られたが、『極北のナヌーク』は、当時のどの劇映画とも異なっていた。配役やシナリオをあるていどまで打ちあわせたうえでカメラを回す点は、『極北のナヌーク』も他の劇映画もほとんど変わらない。しかし『極北のナヌーク』は、撮影現場のさまざまなハプニングを活かしながらストーリーを柔軟に展開させていく点で、初期のフーテージ映画やのちのドキュメンタリー映画に似た点をもっていた。ハプニングに対する人物の反応は、文化的な距離をおし測るうえでも重要な尺度となる。したがって、異文化に対する理解を目的として民族誌映画を作るうえでは、ハプニングを無理に排除しようとする逆効果である。むしろ、ものごとが自然に推移するように、ただしカメラの存在がそれを妨害しないように、お膳立てをするのがよいのだ。フランスの民族誌家ジャン・ルーシュによりうち出されたこの立場は、こんにち民族誌映画の理論的基礎となっている（ルーシュ 1979；村尾 2014）。

## 5) 小括

1920年ころまでの日本における公共視覚メディアの状況を要約すると、以下のようにまとめられよう。博覧会はすでに、民間活力を導入して娯楽化し、さまざまな規模のものが地方にまで波及していた。こうしたなかで、かつての博覧会にみられた教育機能は、恒久施設である博物館に期待されるようになる。ただし人類学的な教育普及に関しては、恒久的な施設において、生身の人間をとおして異文化を伝えるには限界がある。したがって、この時代には、民族誌展示の手法をまだ試行錯誤する段階にあったといえる。

いっぽうで映画は、フーテージから次第に長編の作品へと変化しつつあった。これにともない、上映場所も、仮設の会場から劇場のような大型施設へ移っていった。こうしたなかで、ヨーロッパでは、『極北のナヌーク』のような民族誌映画が登場した。しかしこれは、個性の強い作家とスポンサーとの幸福な出会いなしには成り立たない。民族誌映画というジャンルをさらに発展させていくためには、一定の観衆に支持され、作家のビジネスモデルが安定していかなくてはならないだろう。この課題は、現在も民族誌映画が抱える問題である。ましてや1920年代には、民族誌映画もまだ試行錯誤の段階にあった。

こうしたなか、1922年から1925年にかけて、渋沢敬三はヨーロッパに滞在して見聞を広めた。

#### 4. 渋沢敬三と公共視覚メディア

##### 1) 博物館展示の優位性

渋沢がヨーロッパから受けた影響の内容は、博物館については丸山（2013）が、映画については木村（2014）が述べるとおりだろう。渋沢は渡航中、博物館を積極的にまわり、とくに北欧における民族誌展示の考えかたを、日本の展示にもとり入れた。しかし映画については、詳しいことがわかっていない。『極北のナヌーク』についても、時期的に観覧した可能性が指摘できるだけで、ほんとうにそれを見たかどうかはわからない。

博物館と映画のあいだに横たわるこうしたちがいについては、いくつかの説明が可能だろう。第一に渋沢は、祖父である渋沢栄一の渡航経験をふまえて、博覧会やその後裔である博物館に目を向けたが、映画に対する関心は薄かった。

しかし筆者の考えでは、渋沢の関心がまず博物館に向かった大きな理由は、博物館展示が公共性を高めつつあったことにある。つまり、観覧の場が博覧会から博物館へと移ったことにより、長期間存続するメディアとして体裁が整ってきたのである。これに対して映画は、まだ寄席や見世物の延長であり、興行期間が終わると作品自体が忘れられてしまう可能性が高かった。したがって、博物館展示がより長期でより広範な観衆の話題にのぼりやすかったのに対し、映画はその範囲が依然かぎられていた。

ちなみに、映画作品の参照が博物館なみに自由になるのは、1980年代の磁気ビデオテープの普及を待たねばならない。その後、1990年代のDVDやCD-Rの普及、さらには2000年代のインターネットによる映像配信の普及によって、映画は博物館展示よりもはるかに参照しやすいものとなった。ここにおよんで、映画は公共視覚メディアとしての地位を確固たるものにしたといえよう。

1920年代当時の渋沢は、学術情報の公共的な提示の手段として、博物館展示を評価していた。そして、博物館という恒久施設を維持する活動の一環として、収集活動や調査研究活動、映画記録活動に着手していった。約言すれば、同じ公共視覚メディアでも、博物館のほうが映画よりも渋沢にとって優位な位置にあった。筆者はそのように考えている。

この仮説を検証するため、以下では、渋沢がおこなってきたさまざまな活動を博物館活動との関わりからみていきたい。その作業に先立って、渋沢の活動を年表風にまとめておこう。表1では、渋沢の前半生の40年あまりを、大きく4つの時期に分けて示した。第1期は、渋沢が生まれる1896年から、最初の職場である第一銀行に入行する1921年まで。第2期は、結婚して渡英する1922年から1929年まで。第3期は、渋沢邸が新築される1930年から、日中戦争が勃発する1937年まで。第4期は、1938年以降である。

第2期と第3期は、学界において、渋沢やアチックミュージアム同人の活動がもっとも盛んな時期だった。渋沢個人についていえば、第4期にも業績の刊行が続いており、学会賞も受賞している。しかしそれ以外の点では、第3期が終わる1937年に、さまざまな活動がことごとく転機を迎えている。

そのことの説明としてよく指摘されるのは、戦局が深まって、自由な学術活動が制限されたことだ。表1の「その他」の列に示した「郷土資料陳列所閉館」も、戦局の深まりによるものと説明されている（丸山 2013）。また、映画製作が1937年頃に中断されるのも、フィルムの調達がむずかしくなるためだとされてきた。

戦後に生まれた世代にとっては、さまざまな物資調達が困難になるのは太平洋戦争の開戦後

表1 渋沢敬三の研究活動（1943年以前）

年	渋沢敬三	アチャック・ミュージアム同人	博物館（建物）	映画記録（共同調査を除く）	共同調査	その他
1896	渋沢敬三誕生					
1908			三田綱町の渋沢邸落成。玄關先の厩舎は、栄一が自動車に乗りはじめたため物置となる			
1912			穂高丘登山にさいいて宮本彌ととも集めた採集物が、最初のコレクションの基礎となる			
1915	祖父の邸得により、実業の道に進むことを決意。第二高等学校入学					
1918	二校を卒業、東京帝国大学法科大学経済学科に入学					
1921	東大法科を卒業、横浜正金銀行に入行					
1922	木内登喜子と結婚、渡英（1925年まで）		アチャック会合の最初の記録			
1923						
1924						関東大震災
1925	帰国		アチャック会合再開、「チームワークとしての玩具研究」が提案される	ドイツ旅行の映画記録、渋沢敏三の旅行記録として最初のもの		柳田國男と岡正雄（事務局）が『民族』を創刊
1926	第一銀行取締役就任 『南島見聞録』刊行					石黒忠篤らとともに台湾・八重山・沖縄渡航（台湾は映画記録あり）
1927			藤木喜久磨が入所	陳列室が物置から車庫の上に移動		日本民藝美術館設立趣意書
1928						渋沢が岡正雄に台湾調査を提案、岡は翌年渡欧
1929		今和次郎と宮本勢助が初めて会合に参加				折口信夫らが『民俗学』を創刊
1930		早川孝太郎が『花祭』を刊行		三田綱町邸で花祭の映画記録 飯田にて中馬製の映画記録		
1931						羽後飛島・津軽半島旅行（映画記録あり）
1932	伊豆に静養、豆州内浦漁民史料を整理、第一銀行常務					
1933			「アチャックの成長」	渋沢邸でわぐつ作りの映画記録		
1934	日本民藝学会理事、渋沢は発起人に名を連ねていない		『アチャックミュージアム雑誌』『アチャックミュージアムノート』刊行開始	渋沢邸でイタヤ細工の映画記録		大日本聯合青年団が郷土資料陳列所を設置
1935			『アチャックマンスリー』刊行開始	足半作りの映画記録		
1936			祭の調査研究、活発			
1937	『魚名集覧』の原稿書きはじめ、『豆州内浦漁民史料』刊行		『アチャックマンスリー』休刊、『季刊アチャック』が後継			柳宗悦らが日本民藝館を開設
1938			高橋文太郎が学会研究員を辞職			
1939			第一銀行副頭取			
1940			日本銀行副総裁、『日本魚名集覧』第一冊刊行			
1941						
1942			宮本馨太郎と吉田三郎にわえ宮本常一が根谷民具の資料を整理			
1943						

(1941年)という印象が強い。しかし、日中戦争の開戦(1937年)でフィルムが得にくくなるというのは本当らしい。この年の9月に「輸出入品等臨時措置法」が公布され、カメラやフィルム、印画紙、乾板などは、軍需や医療などを目的とするものを別として、輸入が禁止されたのだ。国内メーカーに対する期待は高まり、これによって富士フィルムなどの生産技術が育成されるが、一般消費者への製品供給は滞った(富士写真フィルム株式会社 1984)。

そのように考えると、渋沢がヨーロッパから帰国してから統制経済が始まるまでの15年という短いあいだに、渋沢学がいかに多方面で花開いたかがわかる。以下では、この多方面での展開と急速な終焉を、博物館に対する渋沢の関わりをみるなかで追っていきたい。

## 2) 民具研究の展開と博物館

最初に、博物館に対する関心が渋沢のなかでどう展開していったか、まとめておこう。渋沢は、渡欧以前、すでに博物館展示に興味を持っていた。表1の「アチックミュージアム同人」の列をみると、最初のコレクションをしたのは旧制中学時代で、アチックミュージアムの会合を初めて開いたのはヨーロッパに渡航する直前だという記録がある。ただし、渋沢自身の記憶では、これに先だつ集まりもあったようだ(渋沢 1992a, b)。

渡欧の前には、鉱物学の鈴木醇らの影響もあり、アチックミュージアムの関心は多岐にわたっていた。活動も、自分のコレクションを持ちよって発表をおこなうことが中心となっていて、好古家たちのゲマインシャフト(鈴木 2003)を彷彿とさせる。しかし、ヨーロッパから帰国して初めて開いた会合では、「チームワークとしての玩具研究」を方針として打ちだし、会の目標が示された(渋沢 1992b)。おそらく、コレクション収集とその研究の成果がヨーロッパの民族誌展示に反映しているのを見て、渡欧前に得た仲間とともに、日本でもそれを実現しようと考えたのだろう。恒久的な展示施設をとおして研究成果を公共の益に供するという、明確な目的をもったゲゼルシャフトへと脱皮したといえる。

ところが、アチックミュージアムの玩具研究は、じゅうぶんな成果となってあらわれてはいない。おそらく、それぞれに異なる博物誌志向をもつメンバーが、ひとつの目的を目ざして協働するのがむずかしかったのだろう。また、玩具研究を提案した宮本璋自身、渋沢の帰国後は、すでに医学者としての道を進みはじめていた。玩具の収集と整理のため、藤木喜久磨(喜久馬)が書生となったが、資料整理を研究にまで高めることはできなかった。その大きな理由のひとつは、玩具が商品として広範囲に流通し、その分布や時代的変遷を追跡しにくかったためだろう(宮本 2008: 23)。次第にわかってきたことは、収集と研究、そして恒久的な展示施設の建設という異なる事業を結びつけるために、別の適切なテーマを模索する必要があることだった。

そうしたなかで、渡欧前とは異なる仲間たちのあいだで民具研究が始まり、軌道に乗った。民具は玩具と異なり、商品として流通する範囲が狭い。言い換えれば、製作から使用(消費)までのサイクルを一定の地理的範囲内で観察できるため、収集時に調査すべき項目が多岐にわたる。このことは、収集と研究を結びつける点で有利に働いた。また、玩具と同様に、博物館施設での展示に適した視覚性や立体性を備えている点もよかった。

玩具から民具へという転換に大きな役割をはたしたのが、早川孝太郎の研究だったといわれる。早川は、柳田國男の兄である松岡映丘の弟子であった縁から、1926年に柳田の紹介で渋沢に会った。そして、早々にまとめる予定だった奥三河中在家の花祭の研究を、モノグラフとしてまとまるまで徹底的に継続するよう渋沢から言われ、1930年によくそれが日の目を見た。この間に早川と渋沢の関係が深まり、渋沢自身も1929年に初めて花祭に参加することとなった(伊藤 2002)。

ただし、渋沢が花祭に参加するのは、1928年が最初という説もある（渋沢 1993）。

早川は、奥三河での調査中、夏目一平らが設立した津具郷土資料保存会の活動を知った。この会は、古文書や考古遺物などとともに、郷土の歴史に関わる「土俗品」を集め、研究し、公開することを目的としていた。まさに、渋沢がヨーロッパの民族誌展示に見てとった研究プロセスを、先行して実施したのだった。渋沢が花祭を実見しようと決心した背景には、こうした事情も大きく作用したようだ。渋沢は、初めて花祭を見た翌日に、会の人たちから 20 点ほどの「土俗品」を譲りうけた（刈田 2002a）。

とはいえ、早川自身の収集センスは、渋沢の収集方針と異なっていたようだ。多数の陶器を集めてきて、渋沢からそれを中断するよう申しわたされたという（宮本 1979：47）。

民具の概念化という意味では、民具ないし物質文化の研究をすでにおこなっていた宮本勢助の影響が大きい。記録のうえで彼が初めて渋沢に会ったと思われるのは、1929年にアチックミュージアムの会合をおこなったときで、このときは今和次郎も初めて会合に参加した。

宮本は、自分の風俗研究において、文献資料や絵画資料、および郵送によるアンケート資料など、異なった資料に依拠しながら研究を進めていた。このやりかたは、渋沢学の方針にさっそくとり入れられた（刈田 2002c）。アチックミュージアム同人が共同で著した足半（あしなか）についての論文では、宮本勢助の子 宮本馨太郎が中心となり、絵図についての考証をおこなった。また、渋沢自身も、絵図資料の検索を簡便にする「絵引き」の整理を提唱し（渋沢 1992c）、戦後になって『絵巻物による日本常民生活絵引』として結実した（渋沢ほか 1984）。

こうして民具研究の見通しが立ちはじめた矢先の 1930年、渋沢邸の敷地にあたらしく洋館が竣工した。本館から離れて、アチックミュージアムの研究施設がかつての物置き跡にでき、陳列室もここに移った。研究施設を拡大する構想は、藤木喜久磨がアチックミュージアムに関わりはじめた頃からあったにちがいない。しかし、研究方針転換の見とおしがついた頃に施設が完成したことは、研究を大いに刺激しただろう。1930年を第3期の始まりとした理由は、ここにある。

翌 1931年に渋沢栄一が死去したため、喪主となった渋沢敬三は過労が重なり、1932年には東京を離れて静養することになった。伊豆の内浦で釣りをしてくらすつもりだったが、地域に伝わる古文書を見せられたのがきっかけで、彼の学術活動がまたもや広がることになった。この豆州内浦漁民史料を活字化するために、アチックミュージアム内に漁業史研究室を新設したのだ。この決断の背景には、すでに奥三河で多数の「土俗品」を譲りうけており、学界で共有して包括的な郷土史の再構成に役立てようと決意していたことが指摘できよう（宮本 2008：60-62）。最終的に、奥三河の民具資料と伊豆の漁民史料は、直接に関わりあうことなく整理・研究されていく。しかし、学究の道を歩みはじめた渋沢は、郷土史または地域史を再構成するという両者の共通項がいつか結びつくと期待していたにちがいない。

その後、「土俗品」の研究は着々と進み、民具という新しい呼び名を与えられるようになった。1933年後半から 1934年前半にかけてのことだ（刈田 2002b）。1934年には、モノグラフとして「アチックミュージアム彙報」の刊行が始まり、「アチックミュージアムノート」の刊行が始まった。また、アチックミュージアムの動きを伝えるニューズレターとして、翌年から「アチックマンズリー」も定期的に刊行されるようになった。とりわけ進んだ履きもの（足半）の研究がまとまり、日本民族学会の学会誌に掲載されたのも同じ 1935年である。これをもって、アチックミュージアムの民具研究は最盛期を迎えたといってもよいだろう。

民具資料にもとづいた研究を反映して、次にはよいよ展示製作が始まるはずだった。しかし、この構想はなかばにして終わったといってもよい。たしかに、アチックミュージアムの資料は日本民

族学会に寄付され、それをもとに日本民族学会附属民族学博物館ができた。しかしこのときには、アチックミュージアム同人たちが予想もしないハプニングが続いた。このことについては、映画と総合調査について述べた後で、もう一度たち戻って検討したい。

### 3) 映画と共同調査

アチックミュージアムの活動において、絵図資料が重要な位置づけを占めていたのは、宮本勢助の影響によるところが大きい。では、映画資料についてはどうだったのだろうか。

絵図とのちがいは、映画技術が当時誕生してまもなく、歴史的資料として過去の考証を助けるような使いかたができなかったことだ。したがって映画資料は、収集というより製作の対象だった。ところが、研究用資料の製作は、じつは収集よりはるかにむずかしい。

研究用の絵図を作るならば、たんに立体的なものを平面に縮減するだけでなく、どのような点を詳細に表現するか、そのためにどのような表現方法を用いるか、いちいち検討しなくてはならない。いっぽう絵引きに利用された絵図は、もともとそうした学術的な観点を重視して描かれていないからこそ、収集して比較分析する対象となった。最初から学術的に作られた資料なら、比較分析のプロセスを経なくとも、それ自体として学術的知見を示していなければならない。おそらくそのことが、渋沢たちの映画資料活用を限定した理由だろう。

ただひとつ、渋沢学の枠組みのなかで、映画を有効に活用する方法があった。それは、とりたてて学術的な立場をとらずに映画を撮り、他の民具資料や絵図資料などを補う情報源とすることだ。これは写真も同じことで、アチックミュージアム同人が撮った写真や映画は、いずれも気ままな構図やカメラワークで撮られたようにみえる。

このことが意味するのは、映画製作が単独でひとつの事業となるのではなく、収集や調査に連動してはじめて意味をなすことだ。渋沢学において、映画はあくまで補助メディアとして用いられた。だからこそ、さまざまな分野の事業に経済的支援をおこなった渋沢も、映画製作にはことさらに支援をしなかったのだと筆者は思う。このことを念頭に置きながら、映画と渋沢学、さらに博物館との関係をまとめておきたい。

渋沢がはじめて自分のカメラを持ち、旅行のようすを記録したのは、渡航先のヨーロッパだった。ドイツまで足を延ばして撮った映画が、渋沢史料館に残っている。このように旅行先で撮影された映画は、自分の経験の想起を助ける補助メディアにほかならず、結果的には渋沢学における映画の位置づけを典型的なかたちであらわしている。

撮影の頻度が格段に増えるのは、1930年からだ。この年の4月、新しい渋沢邸が竣工したことを前節で述べたが、その記念行事として、渋沢は奥三河の人びとを新しい邸宅に招き、花祭の演目のひとつである一力花を奉納した。学界関係者をはじめ、多数の著名人も参列した(鈴木2010)。このときに撮影した16ミリ映画が、神奈川大学日本常民文化研究所と渋沢史料館の両方に残っている。

このときの映画は、旅行記録のように個人的記憶を補助するだけではない。早川が中在家で集めた聞きとり資料や、津具郷土資料保存会が集めた各種資料、渋沢が奥三河で贈呈された民具資料などとともに、郷土史の再構成や生活構造の抽出といった地域研究全般を補助する効果がある。鈴木正崇(2010)の表現を借りれば、民具などの異質な資料を文脈化する役割を映画がはたすのだ。渋沢がそこまで意識的になって映画を残したかどうかはわからないが、自分の仕事をふり返るなかでその意義に気づいた可能性は大きい。1930年以降に映画作品の数が急に増えたことにも、そうした背景があったのではないか。



1931年の中馬<sup>ちゅうませい</sup>制の撮影も、奥三河の地域研究に資するものだった。中馬制とは、信濃を中心として馬による物資運搬をおこなうための輸送体系で、伊那街道や飯田街道を經由して奥三河に到る。この記録は奥三河の花祭とまったく関係がないが、花祭から始まって奥三河の生活の成りたちを見とおそうとするうえでは、重要な記録映像にちがいない。

表1のうち、「映画記録（共同調査を除く）」の列に掲げた映画は、いずれも、上記のように異なる資料の補助情報として記録されたものだ。そして、最終的には、郷土生活の総体を提示するうえで役立つよう期待された。1930年から1937年までのあいだ、そうした試みがたて続けにおこなわれているのがわかる。

いっぽう、その右の「共同調査」に掲げたものは、位置づけがやや異なっている。三河のように、渋沢やアチックミュージアム同人が何度も通って資料を集めた場所も含まれているが、多くの場所は、渋沢がそれほど深く関わったわけではない。ただしこれらの調査に共通しているのは、研究者や農政関係者が多く参加しており、そのなかに当該地域を深く調べる者がいたことだ。さもなければ、大勢の研究者を地域が受け入れることはおぼつかない。こうした形態の調査を共同調査と呼ぼう。

共同調査の特徴は、じつは、異質な資料が一時期に集まることだ。たとえば、神奈川大学日本常民文化研究所に残された共同調査関連の写真のうち、1934年の薩南十島調査に関するものを見てみよう（神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014）。多くの研究者がまちまちな関心で、島の風景を写真で切りとっていたことがわかる。個人調査であれば、ここまで多様な写真資料が集まることはなかっただろう。それこそ、渋沢が考えていたことではなかったか。奥三河に関するさまざまなタイプの資料が早川孝太郎の厚いモノグラフを支えてひとつの地域研究にまとまるように、さまざまな関心から切りとられた写真が、その地域の総合研究に役立つことを考えたのではないだろうか。そのように考えると、1930年代に多数実施される共同調査は、たとえ民具収集をとまわなくとも、地域研究を支える資料収集の一環にはかならなかったといえる。

このような活動が構想されたのは、両極端に広がっていたアチックの活動を収束させようと考えたためではあるまいか。一方には、早川のように何年もかけてひとつの地域に通い、完成した研究がある。そのいっぽうで、高橋文太郎や宮本馨太郎が担当した履きもの研究（足半研究）のように、履きものだけを求めて広い地域を回って得た資料もある。こうした資料は、履きものように比較を意識していた場合を除き、期待したほどには役立たなかった。1937年に刊行された『民具問答集』のまえがきのなかで、渋沢は次のような挫折を述べている。

[民具図彙を刊行するという大きな目的をもって] 資料を選択しやりだしてみると、多少の解説めいたものが必要となってきた。ところがここで実際上一つの行きづまりを発見した。というのは解説せんとする我々が、民具に対して持つ知識のいかにも貧弱であることを自覚したことであった。（中略）一つの民具が材料を調べられて、生れ出て、用いられ、貯蔵され、破棄され、棄てられ、死んでゆくその生活行程を、殊にこれを用いる人々の真意との関連を重視しながら生態学的に見究めて、大なる誤謬なき解説をすることは、現在では到底不可能なことを悟ったのであった。（渋沢 1992d）

ひとつひとつの民具について収集地で聞きとったことがらが不十分だったため、地域的な差異がどのていどにまで及ぶかすら考察できなかったのだ。こうしたことを防ぐためには、履きもの研究者だけが地域に入るのではなく、生活に関わるあらゆる側面をカバーするよう多数の研究者が共同して調査をおこない、それぞれに資料を持ちかえるのがよい。言うは易くおこなうは難したが、そうした希望をもっておこなわれたのが、渋沢たちの共同調査ではなかっただろうか。

#### 4) アチックミュージアムから民族学博物館へ

異なる分野の専門家たちが集まっておこなう共同作業を、調査以外の場面でもおこない、それによって学術活動を活性化したい。1934年に設立された日本民族学会に渋沢が肩入れしたのは、そのような思いからだったのではないか。じっさい、日本民族学会には、物質文化や身体形質、宗教や神話、社会にいたるまで、あらゆる分野の専門家が集まっていた。

この動きを博物館建設の動きと合流させたところに、渋沢のただならぬ経営手腕がみてとれる。ただ残念なことに、時間をかけて機が熟するのを待たずに、時局がどんどん変わっていった。以下、表1の「博物館(建物)」の列をたどりながら、学会設立と博物館建設がどのように連動していったかをみていく。

1934年に発足した日本民族学会の前史には、1925～1929年に刊行された『民族』および1929～1933年に刊行された『民俗学』という、2つの雑誌刊行活動がある。いずれの雑誌も、岡茂雄が経営する岡書院から発行された。『民族』の編集事務は、岡茂雄の弟の岡正雄が担当した。岡正雄は、のちに日本民族学会設立の立役者となるが、『民族』時代に主催者の柳田國男と仲たがいで、ドイツ留学を口実に『民族』の編集から手を引いた。そのさい、第二高等学校時代に岡と同級生だった渋沢は、留学資金のかなりの部分を負担したようだ(岡1994:220)。また、同じ岡書院の『民俗学』の編集に関わった折口信夫は、それが原因で柳田との仲が円滑でなくなったともいわれている(岡1986:100)。

1934年10月10日に発表された日本民族学会発起人のリストには、じつに62名もの学者が名を連ねている。そのなかには、石黒忠篤や穂積重遠など渋沢の親戚、また早川孝太郎や今和次郎、宮本勢助、宇野円空など、アチックミュージアムと縁の深い者もいる。ただ、渋沢自身の名がない(財団法人民族学振興会1984)。ところが、1ヶ月後の11月10日に開かれた発起人会(学会発足の会)では、早々に渋沢が学会理事に選ばれた(民族学研究編集部1935)。爵位を持つ者が発起人会の場に現れて、発起人たちが慌てたのかもしれない。あるいは、設立趣意書の公表直後に、渋沢が学会と関わるようになったのかもしれない。いずれにせよこの後、渋沢は、学会の活動に深く関与することになる。1935年には、本郷にあった学会事務局がアチックミュージアムに移されることになった。これも渋沢の実力だろう。

1936年、渋沢らは「日本民族博物館設立委員会」を組織し、文部大臣に対して博物館設立を建議した。当時、皇紀2600年にあたる1940年に合わせて、日本で最初の国際博覧会を開催する機運が盛りあがっていた。渋沢敬三の叔父(父方叔母 琴子の夫)である阪谷芳郎も、この動きの中心にいた。阪谷の構想に渋沢がどれほど関わったか、明らかではない。いっぽうで渋沢は、1934年の時点ですでに、大日本聯合青年団の郷土資料陳列所を構想するのに関わっていた。この実績を恃みとして、建議に踏みきったのだ。

博物館設立の建議に、日本民族学会が関わった形跡はない。しかし、趣旨書の起草を担当した石田幹之助は、日本民族学会の設立を準備した当事者であり、初代理事長を務めた白鳥庫吉の弟子にあたる(民族学研究編集部1964)。建議にあたっては、石田のほかにも、日本民族学会の人材がそれぞれに活躍したと推測される。

建議はけっきょく採択されなかった。しかし万博終了後まで待てば、万博跡地に博物館が建設される可能性が残っていたと思われる。ところが1937年に日中戦争が始まったために、博覧会開催が延期された。さらに1939年、ヨーロッパで第2次世界大戦が始まったために、博覧会そのもの中止が決まった(古川1998:丸山2013)。国立博物館の夢は、この時点で遠のいた。

しかし、渋沢の夢は国立博物館にあるのではなく、渋沢学を学会規模で実現することにあった。

つまり、多様な専門の研究者が多様な研究資料を持ちより、そのことによって特定の地域なり集団なりの歴史・構造を明らかにするよう構想したのだ。早川のモノグラフを中心とした奥三河研究と、アチックミュージアムの広域な民具研究、薩南十島などでおこなった共同調査——3つの研究の美点だけを併せもった研究が、日本民族学会を足場にすれば可能かもしれない。こうした期待を持った渋沢は、学会附属博物館の設立を見とおし、博覧会中止の決定を待たずにコレクションを寄贈してしまった。1937年10月のことである。

それだけではない。コレクションの寄贈に先だって渋沢は、保谷村（現在は西東京市）に博物館用地8,000坪あまりを準備していた（森1990;武笠2008）。算段をつけるうえでは、アチックミュージアムに深く関わった高橋文太郎の力を借りた。彼の父は保谷村の大地主で、用地周辺で顔が利いたからだ。1936年後半から1937年の前半にかけて土地を取得し、1937年7月（一説には6月）によそから建物を移築した。そして、これをもって日本民族学会附属民族学研究所とし、渋沢邸内にあった学会事務局を移動させた。この頃には、今和次郎が民族学博物館の建物図面や野外展示の見取図を作製していた。12月には、民族学研究所の所員が任命されて、研究活動が始まった。

1938年になると、新築していた民族学博物館の建物が竣工した。1939年5月には、民族学博物館も一般公開されるようになった。開館して4ヶ月後には第2次世界大戦が始まるので、渋沢の事業を国が肩代わりする可能性は完全に断たれてしまったといえる。

それにしても、日中戦争が始まり、皇紀2600年記念万博の見通しが暗くなっていくなかで、これだけ大規模の事業を短期間でやり終えたことには舌を巻くほかない。しかも渋沢は、民族学研究所と民族学博物館の運営に関する経費を、すべて個人負担することを約束した（財団法人日本民族学振興会1984）。民族学研究所には14名もの研究員がおり、人件費だけでも相当なものだったにちがいない。ただし14名のなかには、高橋文太郎や宮本馨太郎、小川徹、磯貝勇など、アチックミュージアム同人として渋沢が従来から経済的支援をしていた者も含まれていた。

だが、集まった研究者が資料を共有してひとつの研究をやりとげるといふ渋沢のプランは、あまりに楽観的すぎたようだ。とくに、おのおのの領分が時間をかけて決まっていくなか、渋沢は待つことができなかつた。このため、学会に土地を寄付した高橋が震源地となり、争いが生じた。武笠俊一（2008）によるとこの争いは、東大出のエリートとアチックミュージアム同人とのあいだでくり広げられたという。真相は不明だが、古野清人と高橋文太郎とのあいだで確執があったことは確かなようだ。

たとえば、すでに公刊されている宮本馨太郎の1940年の日記には、次のようなくだりがある。

二月廿五日（日）昨日、渋沢先生から保谷の博物館・研究所の善後処置につき相談ある由本日午前十一時に来邸する様お話があったので、村上〔清文〕の方を断って、九時半頃家を出て、渋沢邸へ行く。喜多野、及川、馬淵、小川の諸君出席、渋沢先生と昼食を共にし、種々、研究所、博物館及び高橋古野両氏間の紛争等意見の交換を行ふ。

二月廿六日（月）午前十時半頃保谷の研究所へ行く。村上清文に種々言動をつつしみ、自分の将来に対して確固たる方針をたてる様<sup>ママ</sup>意見する。（宮本2004）

この記述は、古野と高橋の対立の最後の局面を記したものだ。この記述に先立つ1月に、高橋は、寄付した土地の撤回を求め、民族学研究所を辞職した。

保谷の研究所及び所属博部売間の敷地の約半分を寄附されてゐた高橋文太郎氏は昭和十五年一月に突

如として個人的理由からしてこの寄附行為を撤回された。われらはかゝる行動が何ら理事会に提起されずして処決されたことに対し頗る遺憾に耐へなかった。(民族学研究所 1941)

高橋の辞職に続いて、村上清文や磯貝勇も研究所を去った。渋沢が理想とした「チームワークのハーモニアス・デヴェロップメント」(渋沢 1992b)は、学会のきわだつ個性には通用しなかったのである。

## 5) 小括

本章では、渋沢学の構想を2つの点からまとめた。すなわち、①専門を異にする研究者による積極的な資料共有と、②異質な資料の支えあいによる地域実像の提示である。いわば、人と資料とがそれぞれに「ハーモニアス・デヴェロップメント」を達成するよう渋沢は考えていたのだろう。

博物館展示は、異質な資料がハーモニーを織りなす場にほかならない。いわば、渋沢学の実現施設である。いっぽう映画資料は、そのなかで他の民具資料や文書資料を補足するような位置づけを与えられた。『極北のナヌーク』のように完成された民族誌映画を、渋沢が目ざしたとは考えにくい。

いっぽう、資料収集が地理的な広がりを見せていくなかで、それを深めるよう考案されたのが共同調査だった。見知らぬ土地に行っただけでは、地域実像を提示するだけの資料は集まらない。しかし、その土地をよく知る研究者と一緒にすれば、その研究者に対して、専門的な見地から新資料を提供することができる。

渋沢は、民族学博物館の建設を構想するなかで、民族学博物館のみならず民族学研究所の設立をも思っていた。これを実現することで、アチックミュージアム同人がカバーしてきた専門をいっそう多様化させ、新資料を効率的に集めることが期待できた。しかし結果は残念なもので、民族学研究所は分裂し、資料の共有はまったくなされなかった。せっかく寄贈したアチックミュージアムのコレクションも、学会にとっては、維持コストがかかるだけの存在になりさがる危険を宿していた。

## 5. 戦後の渋沢学——むすびに代えて

日本民族学会という場で渋沢学を展開させる構想は、人の和の乱れによって破綻した。ただし、古野や高橋の関係がうまくいっていたとしても、渋沢の構想が実現したかどうかはわからない。1942年になると、文部省直轄の民族研究所が設立されたのにもない、学会は研究所を補佐する財団法人民族学協会に改組された。そして、附属民族学研究所も廃止された。いっぽう渋沢は、民族学協会の副会長に選ばれた。

民族学博物館の境遇も恵まれなかった。民族学協会が17名の博物館運営委員と65名の協議委員を任命し、健全な運営を図ろうとしたが、博物館疎開を話しあうために1度召集されただけだったという(財団法人民族学振興会 1984)。1945年1月には、東京師範学校附属小学校の疎開先となり、7月には、収蔵品を彦根工業専門学校へ疎開させた。

このように時局や制度が目まぐるしく変わるなかでは、安定した事業を展開させることはむずかしかったにちがいない。やはり、渋沢の時間は、1937年までにかぎられていたとみたほうがよい。

とはいえ、1937年以後も、一部の研究は盛んにおこなわれた。1939年10月25日頃にアチックミュージアムに入所した宮本常一は、その頃のようにすを次のように述べている。「日支事変は次第にはげしくなっており、世の中が落ち着きを失って、まえのように熱気をおびた研究は見られなくなっていた」。これは、民具研究のことを述べたものだろう。それにも関わらず、「水産史の研究

が盛んになりつつあった（宮本 1979：67）。水産史だけが日中戦争の影響を受けなかったのは、資料の扱いやすさによるのだろうか。

資料の多様さと研究者の多様さという点で、民具研究は水産史研究よりも渋沢の理想に近かったと思う。だからこそ渋沢は、そこでこそコンダクターとしての手腕を発揮したかったにちがいない。

終戦を迎えると、戦争の拡大に加担したとみなされた文部省民族研究所と日本民族学会は解散した。そして、渋沢を理事長とする日本民族学協会が学会業務を担うようになった。渋沢はこのなかで、日本人類学会や日本民俗学会（民間伝承の会）など他の学会とともに九学会連合という組織を作りあげ、学会組織をまたいだ学術的議論の場を設けると同時に、共同調査をおこなった。今でいう大型科研のはしりである。九学会連合そのものは 1990 年代に活動を停止したが、渋沢が理想とした共同調査は、すでにあらゆる分野に定着したとみてよい。多くの研究者たちは、組織に頼らないかたちで離合集散し、それぞれの関心にもとづく共同研究をおこなっている。

以上を「人のハーモニアス・デヴェロップメント」とするならば、資料のそれはどうなっただろうか。渋沢の博物館構想は、大阪千里の国立民族学博物館（1974 年設立）と千葉佐倉の国立歴史民俗博物館（1981 年設立）、および愛知犬山のリトルワールド（1983 年設立）として実現している。筆者の所属する国立民族学博物館では、保存科学を専攻する研究部員や映像民族誌の研究部員、さらには各種資料の専門スタッフを抱えながら、標本資料（民具）や映像音響資料（映画）をはじめとするさまざまな資料の整理と活用にあたっている。さまざまな課題を抱えてはいるが、規模的にも質的にも、渋沢が構想した水準に達しているのではなかろうか。

しかし、ここまでを書きおえてみると、それだけで満足してはいけないと思う。渋沢学の原点にあったのは、学者が見むきもしないものを資料として再評価することだった。そのためにこそ、資料を維持する施設や共同作業を渋沢は必要としたのだ。わたしたち国立民族学博物館の周りでは、たしかにさまざまなものが資料として認められ、保管されるようになっている。しかし、それですべてというわけではない。人びとにとって大事なことがらを見ぬく目を、わたしたちはうけ継いできただろうか。それなくしては、渋沢学の継承はありえないと思う。

---

## 注

- (1) Library of Congress “The Last Days of a President: Films of McKinley and the Pan-American Exposition, 1901”, <http://www.loc.gov/teachers/classroommaterials/connections/mckinley/file.html> (2014 年 8 月 21 日閲覧)

---

## 参考文献

- 有賀喜左衛門 1972. 「日本常民生活資料叢書 総序 —— 澁澤敬三と柳田國男・柳宗悦」日本常民文化研究所（編）『日本常民生活資料叢書 第一巻』日本常民文化研究所, pp. 1-42.
- 飯田卓 2007. 「昭和 30 年代の海外学術エクスペディション —— 「日本の人類学」の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』31 (2) : 227-285.
- 飯田卓 2011. 「日本人類学と視覚的マスメディア —— 大衆アカデミズムにみる民族誌的断片」山路勝彦（編）『日本の人類学 —— 植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』関西学院大学出版会, pp. 611-670.
- 伊藤敏女 2002. 「奥三河の人々 —— 早川・夏目・原田・窪田」横浜市歴史博物館（編）『屋根裏の博物館 —— 実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館, pp. 32-35.
- 伊藤真実子 2008. 『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館。
- 上田学 2012. 『日本映画草創期の興行と観客 —— 東京と京都を中心に』早稲田大学出版部。
- 大場秀章 1997. 「伊藤圭介」東京大学（編）『学問のアルケオロジー』東京大学出版会, pp. 62-82.
- 岡茂雄 1986. 『閑居漫筆』論創社。
- 岡正雄 1994. 『岡正雄論文集 異人その他 他十二篇』岩波書店。

- 118 均 2002a. 「郷土玩具から民具へ」横浜市歴史博物館（編）『屋根裏の博物館——実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館, pp. 40-41.
- 118 均 2002b. 「アチックミュージアムと民具研究」横浜市歴史博物館（編）『屋根裏の博物館——実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館, pp. 84-87.
- 118 均 2002c. 「宮本勢助の民具研究」横浜市歴史博物館（編）『屋根裏の博物館——実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館, pp. 92-93.
- 川村伸秀 2013. 『坪井正五郎——日本で最初の人類学者』弘文堂。
- 菊地暁 2001. 『柳田国男と民俗学の近代——奥能登のアエノコトの二十世紀』吉川弘文館。
- 菊地暁 2004. 「距離感——民俗写真家・芳賀日出男の軌跡と方法」『人文学報』91: 61-96.
- 木下直之 1997. 「大学南校物産会について」東京大学（編）『学問のアルケオロジー』東京大学出版会, pp. 86-104.
- 木村裕樹 2014. 「紀行文と旅映画——渋沢フィルム《飛鳥》を事例として」村尾静二・箭内匡・久保正敏（編）『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』せりか書房, pp. 44-55.
- 國雄行 2005. 『博覧会の時代——明治政府の博覧会政策』岩田書院。
- 小池淳一 2009. 「町・職人・統計——小島勝治論序説」小島淳一（編）『民俗学的想像力』せりか書房, pp. 112-133.
- 礪川全次 2006. 『異端の民俗学——差別と境界をめぐる』河出書房新社。
- 国立民族学博物館（監修）2013. 『渋沢敬三没後50年 屋根裏の博物館 ATTIC MUSEUM』淡交社。
- 財団法人民族学振興会（編）1984. 『財団法人民族学振興会五十年の歩み』財団法人民族学振興会。
- 櫻井弘人 2013. 「民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信」新資料の紹介1——向山雅重の「野帳」にみる渋沢敬三の教え』『伊那民俗研究』20: 54-81.
- 佐々木時雄 1975. 『動物園の歴史——日本における動物園の成立』西田書店。
- 椎名仙卓 1988. 『日本博物館発達史』雄山閣。
- 椎名仙卓 2005. 『日本博物館成立史——博覧会から博物館へ』雄山閣。
- 重信幸彦 2009. 「野」の学のかたち——昭和初期・小倉郷土会の実践から」小島淳一（編）『民俗学的想像力』せりか書房, pp. 134-158.
- 渋沢敬三 1992a. 「アチックの成長」『渋沢敬三著作集 第1巻』平凡社, pp. 11-18.
- 渋沢敬三 1992b. 「アチックマンスリーから」『渋沢敬三著作集 第3巻』平凡社, pp. 13-29.
- 渋沢敬三 1992c. 「絵引は作れぬものか」『渋沢敬三著作集 第3巻』平凡社, pp. 142-145.
- 渋沢敬三 1992d. 「『民具問答集』第一輯 まえがき」『渋沢敬三著作集 第3巻』平凡社, pp. 249-254.
- 渋沢敬三 1992e. 「『豆川内浦漁民資料』について」『渋沢敬三著作集 第3巻』平凡社, pp. 279-283.
- 渋沢敬三 1993. 「旅譜と片影」『渋沢敬三著作集 第4巻』平凡社, pp. 249-460.
- 渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所（編）1984. 『絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社。
- 神宮徴古館農業館（編）2001. 『神宮の博物館のあゆみ——神宮徴古館90年 農業館110年記念』神宮徴古館農業館。
- 鈴木正崇 2010. 「『澁澤民間学』の生成——澁澤敬三と奥三河」『国際常民文化研究機構年報』1: 170-182.
- 鈴木廣之 2003. 『好古家たちの一九世紀——幕末明治における《物》のアルケオロジー』吉川弘文館。
- 関秀夫 2005. 『博物館の誕生——町田久成と東京帝室博物館』岩波書店。
- 神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014. 『国際常民文化研究叢書 8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』神奈川大学 国際常民文化研究機構。
- 武笠俊一 2008. 「高橋文太郎の民俗学と民族学博物館の夢と現実」西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会『高橋文太郎の真実と民族学博物館——埋もれた国立民族学博物館前史』西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会。
- 竹沢尚一郎 2001. 『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』人文書院。
- 竹沢尚一郎 2003. 「民族学博物館の現在——民族学博物館は21世紀に存在しうるか」『国立民族学博物館研究報告』28(2): 173-222.
- 東京国立近代美術館フィルムセンター（編）2004. 『展覧会 映画遺産——東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより』独立行政法人 国立近代美術館・東京国立近代美術館。
- 東京国立博物館 1973. 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館。
- 富士写真フィルム株式会社（編）1984. 『富士フィルム50年のあゆみ』富士写真フィルム。
- 古川隆久 1998. 『皇紀・万博・オリンピック——皇室ブランドと経済発展』中央公論社。
- 松田京子 2003. 『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館。
- 丸山泰明 2006. 「文化政策としての民俗博物館——国民国家日本の形成と「国立民俗博物館」構想」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』3: 53-77.
- 丸山泰明 2012. 「蔵田周忠と民俗学——1920~30年代における民家研究と民俗博物館との関わりをめぐる」『年

- 報 非文字資料研究』8：221-240.
- 丸山泰明 2013. 『渋沢敬三と今和次郎——博物館的想像力の近代』青弓社。
- 宮本常一 1979. 『民具学の提唱』未來社。
- 宮本常一 2008. 『宮本常一著作集 50 渋沢敬三』未來社。
- 宮本瑞夫 2004. 「渋沢敬三先生のアチック・ミュージアムと宮本馨太郎——宮本馨太郎日記抄（二）」『立正女学院短期大学紀要』36：75-84.
- 民族学研究所 1941. 「跋」『民族学年報』3：1-7.
- 民族学研究編集部 1935. 「日本民族学会の成立」『民族学研究』1（1）：215.
- 民族学研究編集部 1964. 「日本民族学会の成立」『民族学研究』29（1）：58-65.
- 村尾静二 2014. 「映画を撮ること、観ること、共有すること——ロバート・フラハティの「人類学的」映像制作」村尾静二・箭内匡・久保正敏（編）『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』せりか書房, pp. 28-43.
- モース研究会（編）2011. 『マルセル・モースの世界』平凡社。
- 森雅雄 1990. 「学会付属博物館のこと」『民族学研究』55（1）：98-104.
- 箭内匡 2014. 「人類学から映像-人類学（シネ・アンソロポロジー）へ」村尾静二・箭内匡・久保正敏（編）『映像人類学（シネ・アンソロポロジー）——人類学の新たな実践へ』せりか書房, pp. 7-26.
- 山路勝彦 2008. 『近代日本の植民地博覧会』風響社。
- 横浜市歴史博物館（編）2002. 『屋根裏の博物館——実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館。
- 吉岡健司・村尾静二（編）1999. 「映像人類学関連年表／映像人類学作品解説」伊藤俊治・港千尋（編）『映像人類学の冒険』せりか書房, pp. 172-223.
- 吉田邦光（編）1985. 『図説万国博覧会史 1851-1942』思文閣出版。
- 吉田邦光（編）1986. 『万国博覧会の研究』思文閣出版。
- 吉田憲司 1999. 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店。
- 吉見俊哉 1992. 『博覧会の政治学——まなざしの近代』中央公論社。
- ルーシュ, ジャン 1979. 「カメラと人間」ポール・ホッキングズ・牛山純一（編）『映像人類学』日本映像記録センター, pp. 75-95.
- Ageorges, Sylvain 2006. *Sur les traces des expositions universelles Paris 1855-1937: A la recherche des pavillons et des monuments oubliés*, Paris : Parigramme.
- Arnaut, Karel 2011. Les zoos humains, (mauvais) spectacles interculturels, in Pascal Blanchard, Gilles Boëtsch, et Nanette Jacomijn Snoep (dirs.) *Exhibitions : L'invention du sauvage*, Paris : Actes Sud, pp. 344-361.
- Morena, Nathalie 2011. Les films Lumière tournés sur les exhibitions ethnographiques, in Pascal Blanchard, Gilles Boëtsch, et Nanette Jacomijn Snoep (dirs.) *Exhibitions : L'invention du sauvage*, Paris : Actes Sud, p. 277.